

「『通訳翻訳研究への招待』最終号に寄せて」

本誌の前身となる『翻訳研究への招待』が日本通訳学会翻訳研究分科会の編集によって冊子の形で刊行されたのは、学会創設から6年を経た2006年12月のことだった。第1号の論文執筆者には、翻訳研究分科会を率いられた水野的先生を筆頭に、わが国の翻訳研究を今日に到るまで牽引してきた錚々たる顔ぶれが名を連ねている。

言語学や文学、あるいは比較文化学などの分野で個別に研究されていた「翻訳」は1970年代以降になると、Translation Studies と呼ばれるひとつの discipline として確立されていく。わが国においては、E. Nida や G. Mounin などの著作が散発的に翻訳出版され、雑誌『翻訳の世界』が創刊されて、誤訳や超訳に関する論争が話題になるといったことはありはしたものの、21世紀にはいっても、翻訳研究がひとつの独立した学問領域としてアカデミア内で承認を得ているとは言いがたい状況が続いていた。

そのようななかで、水野的先生がさまざまな分野に散らばっていた新進気鋭の研究者たちを Translation Studies の名のもとに結集し、『翻訳研究への招待』という形で研究の成果を広く世に問われたことはまさにエポック・メイキングな出来事であった。日本における本格的な翻訳学は水野先生とともに、そして『翻訳研究への招待』の刊行をもって開始されたと言ってもよい。『翻訳研究への招待』というタイトルからも、また初期の諸論文からも、新たな分野へ漕ぎだそうとする研究者たちの志の高さと熱気が伝わってくる。そして第1号が刊行されてわずか2年後の2008年に、日本通訳学会が日本通訳翻訳学会と改称され、通訳のみならず翻訳も研究対象に加えられたことは、『翻訳研究への招待』が当初の目的のひとつを達成した証とも言えるだろう。

第4号以降は紙媒体からウェブジャーナルへと発行形態が改められ、発信力がいっそう強められた。第9号で田辺希久子先生が水野先生から編集長を引き継ぎ、第15号までその任にあたられた。また水野先生、田辺先生とも、編集長ご退任後も編集に携われた。第16号からはタイトルが『通訳翻訳研究への招待』に変更され、学会本体の出版物として学会理事が編集委員長に就任して、今号まで発行が続けられてきたのである。

この度、日本通訳翻訳学会の学会誌が『通訳翻訳研究』に一本化され、『通訳翻訳研究への招待』の発行は今号をもって終了することになった。ここに日本通訳翻訳学会会員を代表し、水野的先生をはじめとする歴代の編集委員長、編集委員、査読担当者の皆さまの多大なるご貢献に心よりの感謝を捧げる。インターネットへのアップロードを長らくご担当いただいた山田優先生、そして優れた論文を投稿されてきた会員諸兄姉にも深くお礼を申しあげたい。皆さまのお力なくしては、今日の通訳学・翻訳学の興隆はなかったのである。

北代美和子（日本通訳翻訳学会前会長）